

財団法人・日本医学専門学校の学校騒動と私立東京医学専門学校の独立分離

唐 沢 信 安

(一) 学校騒動の誘因

財団法人日本医学専門学校は明治三十六年、済生学舎が廃校宣言を行った後に、残された学生と教師が協力して造った医学校である。

ところが、明治四十三年当時、文部省の正式の医学専門学校の指定を得ていない医学校は、日本医学校(後の日本医学専門学校)と東京女医学校(後の東京女子医学専門学校)の二校だけであった。

医術開業試験制度が廃止と決定し、文部省より医学専門学校の指定を受けなければ将来医学校の存続は不可能であった。この重大な時期に、日本医学校校長山根正次(明治十五年東大医学部卒)は、明治四十三年から約五年間、朝鮮総督府の衛生顧問に就任し、衆議院議員及び日

本医学校校長の職を兼任のまま、朝鮮に渡っていた。

留守を守ったのは、山根校長の元書生で秘書役の磯部檢蔵幹事(明治三十三年済生学舎卒)であった。

磯部は山根校長と密接に連絡をとり、学校発展の為に校舎の改築、病院の新設に尽力した。しかし、一方で新聞記者の経歴があり、自校の出版せる『日本医学』に、文部省の私立医学校に対する行政を厳しく批判した論説を度々掲載した。これは文部省の専門学校指定に対し大きな障碍の一因となった。

一方、東大赤門派閥で構成される「明治医会」の有力者入沢達吉教授は、「これ以上医師の数を増加させては医師過剰となる」と称して、日本医学校の指定を阻止すべく文部省に働きかけた。文部省も日本医学校の設備の不充分を理由に指定を行なわなかった。

しかし、明治四十五年に至り文部省は「財団法人、日本医学専門学校」の認可を行った。但し、正式の指定は仲々得られなかった。更に不幸な事に、山根校長の留守中、磯部檢蔵理事と眞泉病院主兼理事の滝沢竹太郎の二人は権力闘争を行い、大正三年五月、財団法人日本医学

校は内部崩壊を来した。眞泉病院は滝沢竹太郎に返却され、財団の基本金の半数を失ったのである。

その責任をとり山根正次は校長の職を辞して、青柳登一が校長に就任した。しかし四ヶ月後に青柳校長は滝沢派の故もあり辞任し、次いで権力のない天谷千松あまやが校長の座に就いた。やがて、学校の権力は次第に磯部檢蔵の手に移って行つた。

(二) 学校騒動

財団の内部崩壊の為、文部省の指定を得られぬ学生達四百五十余名は、大正五年五月一日、全校生徒で大会を開き、左記の決議書を作り、「血判連署」の上、学校当局及び文部省に抗議の運動を起した。

「決議

吾々学生は、日本医学専門学校の指定に対する素志を貫徹せんが為、左記の事項を決議し、敢て違背なからん事を誓約す。

一、山根正次氏及磯部檢蔵氏は、吾が校指定に対し、毫も誠意なく、却つて障碍者なる故を以て、本校と關係を断たしむ。

二、此の問題解決まで同盟休校を為す。

三、若し犠牲者を出す時は全校生徒之に殉ずる事。

斯くて、学生一同四百五十余名は磯部檢蔵の住居である日本病院及び文部省に度々抗議運動を行つた。

五月四日、突如として学校当局は三十六名の退学及び停学処分を掲示発表した。その中には病氣療養中で今回の紛擾に關係のない学生も含まれていた。

五月十六日、学生及び保証人(父兄会)は本郷中央会堂に集合し、協議の結果学生は全員同盟退学を決定した。

大正五年九月十一日、総退学した学生は、高橋琢也の指導の下で東京物理学校内に、「東京医学講習所」を開設し勉学を始めた。後に新宿に移転し、私立東京医学専門学校に昇格した。

残された財団法人日本医学専門学校は、学生数約四十名に減じ、廃校寸前に追いやられた。磯部檢蔵は文部省の勧告もあり学校を去り満州に渡つた。文部省は「評議員会」十三名を作り、文部省管理下で再建を図つた。

(日本医科大学)